

過疎積雪寒冷地域における地域住民の生活実態と 社会関係資本に関する研究

名寄市立大学保健福祉学部専任講師 松岡 是伸

I. 諸言

「…隣近所で用心しなきゃならないんだったら、あんた味気ないしょ…」(A市)

「…この地域の人たちとのトラブルがおきたとき、やっぱり地域の人たちを頼って解決するしかない…」(C地域)

「…地元知り合いがいるとかっていうことに関しては、あこがれみたいなものがある…。…だから地元の人知ってるとか、地元の人に声をかけてもらうっていうのは、たぶんすごく自分の中で価値がある」(B市)

これらの語りは本研究でおこなったインタビュー調査において、地域住民らが近隣住民や地域とのつながりについてどう思うかをそれぞれ語った言葉である。もし自分が同様の質問をされたとき、何と答えるであろうか、そしてこれまでの近隣や地域とのつながりをどのように振り返るであろうか。そして町内会や自治会などから各戸に回る回覧板をみて地域行事への参加を検討したりするであろうか、そもそも回覧板や会費などを人々とのつながりを意識して手渡ししているであろうか。また自分の生活で困ったことや心配事、ご近所での揉め事があったとき、人々と対話し解決にむけて努めるであろうか。

元来、地域で生活をするということは、その地域における人々との信頼、規範、互酬性、ネットワーク、いわゆる社会関係資本を活用しなければならなかった。それらが公共サービス、民間サービスの充実や生活の利便性を追求した技術革新、生活機能の代替サービスなどの発達により、必ずしも地域における社会関係資本を活用することなく生活が営めるようになってきた。残されたのは地域における人々の「しがらみ」というダークサイドな部分だけのような印象を我々に与えてくれる。

しかしながら人々の生活には少なからず、生活課題や困り感、心配事、不安、悩みなどが散見される。本研究で対象とする過疎積雪寒冷地域は、豊かな土地や水資源に恵まれており、食糧・エネルギー政策を支える重要な役割を担ってきた。しかしながら積雪寒冷地域の過疎化と高齢化は、その地域に住む人々の生活に大きな影響を与えてきた。それらは地域における人々の関係性の喪失や生活インフラの衰退、除排除雪の担い手の高齢化・人手不足などであらわれてきている。そこで暮す人々は生活課題や困り感を抱えているのである。これらの点は近年、過疎積雪寒冷地域の除排除雪の在り方や社会関係資本の状況、高齢者の生活実態調査などが明らかにしてきた。

しかしながらこのような調査では、過疎積雪寒冷地域で住む人々の生活の全体性を把握した結果にまで至っていない。そして社会関係資本の必要性は示されているものの具体的な地域住民の生活実態・課題、困り感を踏まえた社会関係資本の形成を示したものにまで至っていないと考えられる。そのため本研究では、これまでの既存の調査研究では明らかになっていない地域住民の生活の全体性と抱える課題、困り感を明らかにし、社会関係資本の蓄積と活用、形成の実態を考えることである。

そこで本研究では、過疎積雪寒冷地域における地域住民の生活課題と困り感、社会関係資本の3つの観点からインタビュー調査を行い、これらの観点を一体的明らかにしていくことで社会関係資本を蓄積過程・実態、活用を明確にしていくことが目的である。

Ⅱ. 本研究における先行研究、方法、枠組み

1. 先行研究について

(1) 社会関係資本とソーシャル・キャピタルについて（用語の定義）

ソーシャル・キャピタル (Social Capital) に関する明確な定義は現在までに存在していない。そのような中で、一般的に多くの既存研究に引用されるパットナム (1993) の考えによれば、ソーシャル・キャピタルとは人々の協調的行動を活性化することで社会的な効率を向上させることである。そしてそれらの社会組織の特徴として「信頼」「互酬性」「ネットワーク」があるという。そしてこれらの日本語訳には、「社会資本」と邦訳されることが多かった。

しかしながら日本の「社会資本」は、Social Overhead Capital のイメージが強く、すなわち社会的インフラへの公的投資を社会資本と考えることが多い。これらのことからパットナム (1993) や宇沢弘文 (2000)、宮本憲一 (1976) が示しているソーシャル・キャピタルとは意味が相違するのである。

そこで本研究では、ソーシャル・キャピタル (Social Capital) を Social Overhead Capital との混同を避けるためにあえて日本語訳では「社会関係資本」とした。これによってややもすると社会的インフラ投資に間違えられがちなソーシャル・キャピタルや社会資本論のイメージを払拭することができる。同時に社会関係資本とすることで、ソーシャル・キャピタルの概念に含意する人々のつながりと活動、その構成要素として「信頼」「互酬性」「ネットワーク」をより表現できるためである。

以上のことから本研究で用いる社会関係資本を定義づけると、人々のつながりや協調・協働的活動は、人々の「信頼」「互酬性」「ネットワーク」を基盤として活性され、社会的活動の活性化や効率化などを向上させていくことであるとする。

(2) 先行研究の到達点

社会関係資本については、いくつかの理論的系譜がある。河田潤一 (2015) は、それらの系譜を検討しソーシャル・キャピタルの類型化を試みている。河合によればソーシャル・キャピタルをネットワークの開放性/閉鎖性という軸と資本の外部性効果の集積性/拡散性

という軸によって4つに類型化していた。この資本の外部性効果の集積性 / 拡散性は、集積性については「便益は個人の投資の見返り」(河田 2015;29)であり、拡散性については「地域やコミュニティ全体の利益/不利益を及ぼす方向」(河田 2015;29)と言っている。これらによればネットワークの閉鎖性と集積的な資本の外部性効果は「クラブ型」、ネットワークの閉鎖性と拡散的な資本の外部性効果は「結束型」、ネットワークの開放性と集積的な資本の外部性効果は「仲介型」、ネットワークの開放性と拡散的な資本の外部性効果は「架橋型」となるという(河田 2015;30)。これらの類型のうえで、問題点としては「…架橋型ソーシャル・キャピタルと結束型の緊張を孕む界面における軋轢を、関係的な資本として国家と市場へと媒介する市民的な「利益媒介の仕組み」をいかに構築するかである」(河田 2015;30)という。

また秋葉陽二(2011)は社会関係資本の概念整理として縦軸にミクロとマクロ、横軸に社会構造と価値観で座標軸を構成し、ミクロと社会構造の象限に「私的財としての社会関係資本」、マクロと価値観の象限に公共財としての社会関係資本、座標軸中央に「クラブ財としての社会関係資本」を配置している。この座標軸から見れば、本研究の対象の特性上、ミクロと社会構造、ミクロと価値観の象限から迫っていくことになる。

一方、秋葉は社会関係資本の外部性に迫り、そのうえで「心の外部性」として「社会関係資本における外部性は公害などの物理的な外部性と異なり、人が心の中で認識する能力に負うものである。つまり人々の心に働きかけて、人々が認識して初めて意味を持つ…」といい、社会関係資本は心の外部性を扱おうとする試みのひとつとも言っている(秋葉 2011;28, 29)。さらにこの「心の外部化」は市場へ外部化しない(できない)場合もあるという。市場へ外部化しない(できない)方が価値を持つ場合があるという。また秋葉によれば「心の外部化」は市場への内部化は可能であるが、それでは社会関係資本自体が崩壊する場合があるという(稲葉 2011 ; 28, 29)。社会関係資本において心の外部化は重要な点である。冒頭に見た語りは、市場に内部化されていた場合、語られることはなかったであろう。

以上の点から本研究はこれらの先行研究の到達点を踏まえておこなっていく。

2. 分析の方法について

本研究の分析では、個別インタビュー調査並びにグループフォーカス・インタビュー調査にて得られたものをすべて逐語記録としてテープ起こしを行なった。そのうえで研究協力者の語りの内容・意味を解釈的に分類・類型化した。

そこで本研究の目的に従い分析テーマを「ある特定地域に在住する地域住民が、その地域で暮していくために自らの生活課題や困り感、人々とのつながり(社会関係資本)を他者との相互作用を経ることによってどのように社会関係資本を蓄積し地域で生活を営んでいるかの過程」とした。

3. インタビューガイドについて

インタビューガイドは個別インタビュー調査とグループフォーカス・インタビュー調査の2つのガイドを用意した。個別インタビュー調査におけるインタビューガイドは以下の通りである。【I. あなたの日常の生活状況と困り感について】は3つの設問で構成されて

おり 1) あなたは、普段、どのような生活を送っているか（現役世代は仕事も含めて）、2) あなたは、普段の生活の中で困ったこと、悩み、心配事について（現役世代は仕事も含めて）、3) あなたの生活の中で困った体験・経験は、どのように解決・解消したかなどである。

【Ⅱ. 社会関係資本に関する質問】は 3 つの設問で構成されており、1) 人々の「信頼」については、i あなたの隣近所には、信頼できる人について、ii 親戚に信頼できる人について、iii 職場や仕事で付き合っている人には信頼できる人について、iv たいいていの人は信頼できるか、それとも常に用心するべきかなどである。2) 人々の互酬性的規範に関する質問では、あなたは地域活動などに参加しているかなどである。3) 人々のネットワークについては、i あなたのご近隣とのつきあいについて、ii あなたの親族との交流について、iii あなたは活動を通じてつながりの充実、若しくは負担感についてなどである。

【Ⅲ. その他】では、地域への愛着や満足度、住み続けたいかなどである。

グループフォーカス・インタビューにおけるインタビューガイドは、以下の通りである。

1) これまでに生活している中で困った体験について、2) みなさんが困った体験や経験をどのように解決したかについて、3) 地域やみなさんが困らない生活を実現するためにどのような人と人とのつながりが必要だと思うかなどである。

4. 研究協力者（対象）について

本調査研究における研究協力者は、個別インタビュー調査とグループフォーカス・インタビュー双方において「調査対象とする地域に在住し生活を営んでいる者、または調査対象とする地域に通勤し仕事や地域活動などに多く関わっている者」と設定した。

個別インタビュー調査は半構造化面接で行い、一人あたり平均 1 時間 30 分程度のインタビューを実施した。グループフォーカス・インタビューは、A 市では子育て世代の母親、B 市では高齢者世代と、子育て世代の母親に対してそれぞれ調査を実施した。平均 1 時間 45 分程度であった。両調査とも実施期間は、2015～2016 年である。

本調査における個別インタビュー調査の調査対象は、総計 67 名である。A 市では 22 名（男性 9/女性 13）、B 市では 21 名（男性 12/女性 9）、C 地域では 24 名（男性 18/女性 6）であった（表-1、表-2、表-3 を参照のこと）。グループフォーカス・インタビュー調査では A 市の子育て世代の母親は 13 名（すべて女性）、B 市の高齢者世代 11 名（男性 3 名/女性 9 名）、子育て世代の母親は 3 名（すべて女性）であった（表-4、表-5、表-6）。

研究協力者（対象者）は A 市では高齢者が最も多く、次いで公務員などを含む団体職員、会社員、大学生であった。B 市では高齢者が最も多く、次いで公務員などを含む団体職員、会社員、大学生であった。C 地域では、教員、学校事務を含めた学校職員が最も多く、次いで自営業者、高齢者の順であった。また C 地域の人口は 65 人であり、本調査は地域の総人口に対して約 37% をカバーした調査となった。

なお A 市、B 市では各 1 名ずつ未成年（10 代後半）が研究協力者となっているが、大学生という社会的地位を勘案し、未成年研究協力者に対する保護者への承諾は適用せず、この点を詳細に説明し、本人の承諾と同意のもと調査を実施した。

5. 調査対象エリアの概要

(1) A市の概要

A市は北海道北部地域の中央に位置する過疎積雪寒冷地域である。寒暖の差が激しく最高気温は約30度、最低気温も約マイナス30度である。A市は交通の要衝地となっている。人口規模は約2万8千人、世帯数が1万4千世帯で平成の大合併以来、減少傾向にある。高齢化率は65歳以上で約31%（約8千人）である。A市の産業構造は第1次産業では農業・林業、第2次産業では建設業、第3次産業では卸・小売、宿泊業などがそれぞれ中心である。

中心街は、国道沿いからJR駅に向かってのアーケード商店街である。このアーケード商店街を中心に見た場合、中心街に百貨店、西側に市立病院があり、北側に市役所、2kmほど離れて市立大学となる。また南部郊外は工業地帯となっているものの、大型ショッピングモールと、スーパー、家電量販店などが出店しショッピングエリアとなっている。市内では、公共機関のバスの運行と、大型ショッピングモールのバスが運行し市内の要所を結んでいる状況である。子どもの遊び場としては、子育て支援センターや発達支援センターなどが中心街近郊にあるものの、遊び場となる大型施設は、中心から約4kmほど北側にはなれており、住宅街も越えたエリアである。中心街から四方、2～3kmの範囲に公共機関などが配置されている。

(2) B市の概要

B市は北海道北部に位置する過疎積雪寒冷地域である。A市よりも南部に位置する。年間の気候の寒暖差は60度となり、最高気温は約30度、最低気温も約マイナス30度である。冬場は厳し寒さと積雪にさらされながらも夏場は梅雨がなく過ごしやすい。

人口規模は、総人口が約2万人であり、総世帯数は約9千世帯である。高齢化率は65歳以上で約36パーセントである（約7千人）。B市の産業構造は、主に第1次産業は農業・林業・畜産業である。特に畜産業は「サフォークランド」として羊の畜産に力を入れている。そのため観光資源として世界的にも珍しいとされる羊を中心とした観光資源がある。農業は、古くから稲作が盛んであり、その後畑作や野菜の栽培も盛んになった。近年では有機物による「土づくり」や冷涼な気候を生かした「クリーン農業」を展開し様々な農作物が栽培されている。

B市の中心街は、国道沿いに個人商店などがあり南部を中心に百貨店やショッピングセンター街などが広がっている。中心街から北部にかけてはコンビニエンスストアや個人商店がいくつか散見される状況である。医療機関は市立病院が中心部よりの東部にあり、その他、個人診療が散見される。子どもの遊び場に関しては、中心街から南部、西部にあたる駅近郊に配置されている。よって地域資源は、中心街から南部にかけて多く見られ、北部は乏しく、典型的な住宅街であった。

(3) C地域の概要

C地域は北海道北部に位置する過疎積雪寒冷地域である。A市よりも北部に位置し、C町の1つの地域（地区）である。しかしC町の中心街からは20km離れている。寒暖差も激しく、A市やB市よりも豪雪地帯である。C地域の人口規模は65人で15～64歳が最も多

く、次いで65歳以上、15歳未満である。高齢化率は推計で約17%であり本研究対象のエリアの中では最も低い地域である。

C地域は中心街には、小中学校と観光施設があり、そこを中心に東側に民間宿泊施設、西側には山村留学施設、公民館などがコンパクトな配置で見られた。この中心街から道路沿いに個人宅が広域で散見された。個人宅の配置は典型的な農村都市という配置であった。

6. 倫理的配慮

本調査研究では、個別インタビュー調査とグループフォーカス・インタビュー調査の双方の調査実施において口頭と文書で研究協力者への守秘義務などを説明し、署名による研究協力同意書を得て実施された。データ分析過程では、個人情報情報の漏洩や個人情報情報の特定を避けるため細心の注意を払い行われた。また本調査の全過程については、名寄市立大学倫理委員会の承認を得て実施されている。

表-1 A市 研究協力者の概要 (対象の概要)

No.	コード	職場など	年齢	性別
1	A-1	高齢者	80代前半	女性
2	A-2	高齢者	70代後半	女性
3	A-3	高齢者	80代後半	女性
4	A-4	高齢者	70代後半	女性
5	A-5	高齢者	70代前半	女性
6	A-6	高齢者	70代後半	女性
7	A-7	高齢者	70代後半	女性
8	A-8	高齢者	80代後半	女性
9	A-9	会社員・管理職	30代後半	男性
10	A-10	高齢者	70代前半	男性
11	A-11	高齢者	70代前半	男性
12	A-12	団体職員・管理職	30代前半	男性
13	A-13	大学生	20代前半	女性
14	A-14	団体職員	20代前半	女性
15	A-15	会社員	30代前半	男性
16	A-16	専業主婦	30代前半	女性
17	A-17	会社員	30代後半	男性
18	A-18	団体職員	30代後半	男性
19	A-19	団体職員	50代前半	男性
20	A-20	団体職員	40代前半	男性
21	A-21	大学生	10代後半	女性
22	A-22	会社員	20代後半	女性

表-2 B市 研究協力者の概要 (対象の概要)

No.	コード	職場	年齢	性別
1	B-1	高齢者	60代後半	男性
2	B-2	高齢者	80代前半	男性
3	B-3	高齢者	60代後半	女性
4	B-4	高齢者	70代前半	男性
5	B-5	高齢者	60代後半	男性
6	B-6	高齢者	70代後半	男性
7	B-7	会社員	30代前半	男性
8	B-8	主婦	30代前半	女性
9	B-9	自営業社長	70代後半	男性
10	B-10	自営業	70代前半	女性
11	B-11	大学生	20代前半	女性
12	B-12	会社員	21代前半	女性
13	B-13	高齢者	70代後半	男性
14	B-14	高齢者	60代後半	男性
15	B-15	高齢者	50代後半	女性
16	B-16	高齢者	60代後半	男性
17	B-17	団体職員	20代前半	女性
18	B-18	高齢者	60代前半	女性
19	B-19	大学生	10代後半	女性
20	B-20	会社員	30代前半	男性
21	B-21	会社員 (休職中)	30代後半	男性

表-3 C地域 研究協力者の概要 (対象の概要)

No.	コード	職場	年齢	性別
1	C-1	高齢者	80代後半	男性
2	C-2	自営業・酪農家	40代後半	男性
3	C-3	自営業・工房経営	50代前半	女性
4	C-4	自営業・酪農家	30代前半	男性
5	C-5	自営業・酪農家	50代後半	男性
6	C-6	学校教員	50代前半	男性
7	C-7	学校教員・保健師	30代前半	女性
8	C-8	学校教員	30代前半	男性
9	C-9	学校教員	30代後半	男性
10	C-10	学校教員	20代後半	男性
11	C-11	学校教員	40代前半	男性
12	C-12	学校教員	20代後半	女性
13	C-13	学校教員	40代後半	女性
14	C-14	学校教員・管理職	50代前半	男性
15	C-15	学校教員・管理職	50代前半	男性
16	C-16	学校教員	40代後半	女性
17	C-17	学校事務職員 (校務補)	30代前半	男性
18	C-18	学校事務職員	30代前半	男性
19	C-19	学校教員	30代後半	男性
20	C-20	高齢者	70代前半	男性
21	C-21	寄宿舎職員	60代前半	男性
22	C-22	自営業・会社経営	60代後半	男性
23	C-23	自営業・会社経営	50代後半	女性
24	C-24	自営業・農家	40代後半	男性

表-4 A市 子育て世代

研究協力者の概要 (対象の概要)

No.	年齢	性別
1	30代前半	女性
2	30代前半	女性
3	20代後半	女性
4	30代後半	女性
5	30代後半	女性
6	20代後半	女性
7	40代前半	女性
8	40代前半	女性
9	40代前半	女性
10	20代後半	女性
11	30代前半	女性
12	30代後半	女性
13	30代後半	女性

表-5 B市 高齢者世代
研究協力者の概要(対象の概要)

No.	年齢	性別
1	80代前半	男性
2	90代前半	女性
3	80代後半	女性
4	60代後半	女性
5	70代後半	男性
6	70代後半	女性
7	80代後半	男性
8	80代前半	女性
9	80代後半	女性
10	80代後半	女性
11	80代後半	女性

表-6 B市 子育て世代
研究協力者の概要(対象の概要)

No.	年齢	性別
1	40代前半	女性
2	30代後半	女性
3	20代後半	女性

Ⅲ. 結果 —過疎積雪寒冷地域における生活課題・困り感における 社会関係資本の実態について—

では、過疎積雪寒冷地域である A 市、B 市、C 地域の調査結果を見ていきたい。

1. A 市における生活課題、困り感と社会関係資本の蓄積に関する結果

では、A 市における生活課題・困り感と社会関係資本の実態について見ていきたい。

(1) A 市における生活課題・困り感

A 市は生活、医療、学校などの生活関連施設、商業施設、医療・学校関連施設等が整備されており、特定の機関・施設、例えば病院が無いなどの困り感はほぼ見られなかった。そこで A 市における生活課題・困り感が特徴的に見られたのが、これら関連施設にアクセスする移動に関わる課題、困り感であった。その他、子育てに関する生活課題・困り感や病気に対する不安、悩み、困り感が見られた。また上述した内容にも関連するが、冬場の積雪の影響が見られ、除排雪の困り感もあった。

① 移動に対する課題、困り感

「移動に関する課題、困り感」とは、A 市の地域住民が商業施設や病院、大学などへのアクセスに不便や困り感を感じていることである。その不便や困り感は、アクセスする手段の利便性が悪いことや冬場の移動には困難や困り感があることなどである。そしてアクセス手段で多く依存している自動車の運転への不安や心配、困り感に及んでいた。

まず、商業施設や病院のアクセスの不便さや困り感について 20 代の女性は、

「…移動がすごく限られるので、時間（が）限られている中で、行きたいところに行けないのが、結構、今、つらいというか、冬場になったらもう買い物（に）行く場所は、（スーパー名）とか（に）限られてくるかなという感じですね」（A-14）

という。移動に多くの時間がかかり、冬場となれば移動する範囲も限られてくることを語っていた。この女性は自動車を所有しておらず、この移動の制限や時間に対して職場の人の自動車に相乗りや公共交通機関（バス）の利用、夏場は自転車などを利用することである程度困り感を解消させていた。しかし冬場は自転車を利用することができなく、バス停までの移動や職場までの徒歩移動などに困りを感じていた¹。ある大学生の冬場の通学についての語りである。

「…すごく雪が降った日とかは、通学も朝イチなので除雪がされていなかったりして通学が大変なことがあります。豪雪の日は大変ですね、いろんなことで…」(A-21)

次に自動車を所有し運転ができれば、さほど移動に関する課題や困り感は見られないものの、加齢に伴い自動車運転自体に困難をきたす場合が考えられる。ある高齢女性は、

「…今後、まあ年が年（年齢）だからもう2～3年したら…免許もやっぱり、自分で車、乗らないわってなったらどうしようかって考える時はあるね…」(A-3)

という。加齢に伴う運転の困難性を年々感じているという。この女性は運転できなくなったときのことを考え、これまで断り続けていた高齢者のタクシーチケットサービスを受けることにしたと語っていた。この他にも冬場の影響によって、移動、特に自動車での移動への困り感も見られた。具体的には冬場の路面凍結や吹雪、視界不良などの影響で低速走行を余儀なくされ、移動に余計な時間がかかってしまうなどであった。

② 子育てに関する生活課題・困り感

「子育てに関する困り感、悩み、不安」は、子どもの生活スタイルに生活や仕事を合わせ、そして夫や妻の家事分担の困り感、悩みが見られた。そして冬場の冬場の子どもの遊び場の無さなどが見られた。まず、夫婦間の家事分担であるが、ある子育てをする男性は、

「…今、妻の方は働いていないのでその部分では、ほとんど子育てはしてもらってるような状況なんですね。またこれから、子どもが幼稚園とか行くようになるので、その部分では分担をして、（これから）嫁さんが働き始める予定になってるんですよね。そこで（家事）分担をどういうふうにしていったらいいのかなというのがありますね」(A-9)

という。この男性は、食事の片付け、子ども入浴、部屋の掃除などをできる限りおこなっているという。それでも子育てをしながら、共働きになったときの家事分担が困り感として浮かび上がってくる。この点は子育てをする親という観点からワークライフバランスの課題にもつながってくるであろう。

また冬場の子どもの遊び場の無さについて、子育てをする女性は、

「…（冬場は）公園にも行けないしとなると行く場所がだいたい決まってくるかなということですね。（商業施設名称）か、（公共施設名称）の室内の遊び場しかない」(A-16)

ある男性は、

「一応、(公共施設名称) って子ども遊べるようなところあるんですけども、結構、山奥じゃないですか。知らない人がけっこういると思うんですよ。(もともと) A市の人はわかっていると思うんですけど、よそからきた人で娯楽施設ってあんな山奥って。もうちょっと国道ぶちにつくるとかって。そういうことをちょっとやったほうがいいんじゃないかと思うんですけど」(A-19)

という。冬場の子どもの遊び場が制限されることと、子どもが遊べる公共施設が、郊外にありアクセスに不便を感じていた。

③ 疾病・病院に対する困り感、悩み、不安

「疾病・病院に対する困り感、悩み、不安」では、これまでの病気の経験や今後の健康、認知症に対する不安が見られた。また病気の経験から一人暮らしに不安をおぼえ、自宅で倒れたときに発見してもらえるように極力、鍵をかけない住民もいた。その持ち家で一人暮らしの高齢女性の語りである。

「…私、一人で玄関、鍵かけて、倒れたりなんかしたら困るから…。…一人だからね。鍵かかってしまったら、やっぱり。入ってくることでできないでしょ？、なんぼ、言ったってね。私、1回脳管梗塞で倒れているから。だから…」(A-6)。

④ 除排雪における困り感、悩み、不安

「除排雪における困り感、悩み、不安」では、個人の除排雪の悩みや心配、困り感は、身体的衰えにより、年々、除雪が困難になることが多く、高齢者で持ち家の場合に見られた。高齢者でも公営住宅の人々にあまり個人的な除排雪の悩みは見られなかった。若年・中年層でアパート暮らしの場合、共同管理部分の除排雪が少なからず必要で大雪の日や出勤、通学時に余計に時間が取られてしまうことに困り感を抱えていた。持ち家の場合、多くは業者に除排雪を委託していた。業者委託の場合、ワンシーズン2万円から4万円程度であるが、降雪量の多さと加齢に伴う身体的な負担を考えれば、非常に助かっているという語りが多く見られた。

このような中で除排雪は自宅の隣で自営業を営む人が無償でやってくれるという語りが見られた。そしてその本人は、夏場などは隣の家の草むしりなどをするという。この場合、そのように取り決めたわけではないという。地域での互酬性のひとつの形態である。

「…隣が(自営業者)さんなの。…。その人がね、ブル(ブルトーザー)入ると(自宅前の雪を)もっていってくれるの。だから、朝起きたら、きれいになってるの。だから、夏は隣のうちの周りの草を全部私がとるの。そんな感じ。だから、雪はそんなに苦労しない。

[それは除雪を委託しているのか]…そういうわけでない。知らん間に朝起きたらみんなもって行ってないからね。あら、隣のお孫ちゃんがもって行ってくれたわって。…。まあ私も

退屈してるから、草とってやるわって。隣近所って、うちはそんな感じおかげさまで。…。だから、やっぱり隣近所も大切にしておかないとね。その点、幸せだよ。私…」(A-4)

(2) A市における社会関係資本の実態

A市における社会関係資本は、個人間若しくは組織、特定集団間の信頼、規範、ネットワークの形成と言える。地域で生活する個人の信頼や考え方、価値観も個人や組織、特定集団を意識したものとなっていた。そして自分自身の生活に対する自助原則（自助規範）も見られ、社会サービスなどを利用せず自活する傾向も見られた。以下はある30代男性の個人の他者に対する考え方と、ある高齢女性の生活を自活した語りである。

「…悪い噂とかってよくあるじゃないですか。そういうのはあんまり信用しないようにしていて自分がみたものでこれは駄目だなとか、悪いなって思うものを悪いならいいんですけど、そうじゃなくて人が流したこととか、噂とか、そういうのは信用せずに自分の目で見ていこうかなってというのは思ってますね…」(A-9)

「…(民生委員に対して)私よりもっと困ってる人いるから(福祉的な支援(主に生活保護)を)そっちにまわしてあげてくださいっていったら、(民生委員から)なしてそうやって言うのってでは言われたけど」(A-4)

このような中で加齢に伴って信頼感は希薄になるなどである。ある高齢女性は、

「…やっぱり、年とともにね。だからあんまり心の底から信頼してしゃべるっていう人はあんまりいないね。」(A-7)

という。この女性は、「責任」が薄れるからだと後に述べていた。この責任感の希薄化は、社会関係資本に少なからず影響を及ぼすと考えられる。この女性が自らのネットワークのどの範囲で信頼の希薄化と無責任が生じたのかは定かではない。しかしこのことから信頼や規範、ネットワークが特定集団や友人に対して述べていると考えることができる。それは「責任」を示し合う関係と範囲だからである。この点から見てもA市の社会関係資本は個人間若しくは組織、特定集団間の信頼、規範、ネットワークの形成と言える。では、その人々のつながりはどのようになっているのであろうか。ある女性は、

「…隣の団地に上の子と同級生の同じ幼稚園に通ってるお母さんの友達がいるので毎朝顔合わせるのでいろいろ話したり、野菜貰ったりお互いあげたりとか…」(A-16)

という。ある高齢女性のお茶呑み友達とのつながりでは、

「…温泉行くとか。そんなに出かけないね。カラオケ行かないし。遊びって言ったらどうかなー。お茶飲んで、食べて。しゃべってるとか…」(A-3)という。

という。これらは特定集団や友人とのつながりの中で開放的なネットワークである²。

一方でつながりのダークサイドな面も見られた。それは特に高齢者間で見られたが、健康に対する妬みが周囲の人々や地域にはあるという。この健康への妬みに対してある女性は、

「年いくとね、耳も遠くなるしね、けっこう。70、80（歳）なってくると身体の線も変わって来るし、妬みっていうか。そういうのがけっこう出て来るんですよね」、「…こうやって健康で動いてると、妬みって出てくるからね。それは個人の差だから仕方ないからね。よく毎日、出てあるくねとかさ。だから、なるべく聞こえないようにしてるけどね」(A-7)

という。このような人々の間の妬みは、人々の信頼と規範を毀損することもある。そしてこれらが蔓延するときつながりは希薄なものとなるであろう。

(3) 地域活動に対するつながりと負担感

A市の地域活動は町内会や老人クラブ、お祭りなどの実行委員、ボランティアなどから私的な女性向けフィットネスジム、趣味のサークルなど多岐にわたる。このような中で特に、町内会活動は負担感を示す人々も見られたが、趣味のサークルなどではつながりや充実感を示すことが多く見られた。

では、地域活動に対するつながりの充実についてであるが、ある20代前半の女性は、

「…実家にいたころの町内会は活発だったので掃除とか旅行に行ったりとかもあったので、なんかそういうのは大事にしていきたいです。町内会の役員やれって言われたらやろうと思ってるし、なにか参加できたらなと。積極的に参加したいと思ってます」(A-17)

という。一方、地域活動に対する負担感としては、

「まあ負担はありますね。朝早かったりするので、だいたい9時からとか。9時ってご飯食べている時間だから、いつも。結構、子どもご飯たべさせないで我慢させていくときとかあって、それは私がついていうより子どもがかわいそう。だからはやく終わらないかなと思います。まあでも、小学校とかそういう時間普通じゃないですか。高齢の方とかも起きて活動始める時間だから。小さい子いたら結構大変ですね」(A-16)

という。そして、つながりと負担感が入り混じっているある男性は、その先に申し訳なさを感じているという。

「…まあ基本的には充実感はあるんですけど、…(町内会)子ども育成部のイベントなんですけど、廃品回収にしても行けないっていうのが実際、出てくるんですよね。こっちで主催しておきながら本人がいけないとか、お願いしますねっていう形で、他の方をお願いすることも…。そういう意味では負担感っていういいのかわからないんですけど、申し訳ないなっていう気持ちはあったりしますね」(A-9)

このような中で町内会活動に積極的に参加していた女性は、その過程で人間関係のイザコザに合い、活動を拒絶するようになる。これは特定集団における規範性の暗い部分であって、これが蔓延することで信頼やネットワークが毀損することがある。この女性にとっては、町内会活動とのつながりが毀損した結果となったのである。

「…町内会活動…、その中に拒みっていうのがある。一生懸命するならするだけに拒みっていうのがあって、町内会は私、大嫌い。何事も町内会は嫌だということになってる。[拒みというのは具体的にどういうことか]…やっぱり、…一生懸命してるでしょ、そうしたら、なんでね、自分が先だからってこういうことしなきゃならんのさ。なんで私達まで、こういうことするのさっていうこと。…。…（自分が）何かっていったら、拒みだすわけさ。それで、今で言ったら、いじめだね。私、なんぼあの人に泣かされたかって…。…それで、町内会は一切足入れない」(A-3)

2. B市における生活課題・困り感と社会関係資本の蓄積に関する結果

では、B市における生活課題・困り感と社会関係資本の実態について見ていきたい。

(1) B市における生活課題・困り感

B市は生活、医療、学校などの生活関連施設、商業施設、医療・学校関連施設などが整備されているものの、これまで見てきたA市のように充実しているわけではない。特に医療機関には産科が無く、小児科A市より医師が派遣されてくるのが現状である。そのため小児科に関する夜間診療や緊急時の対応などはおこなわれていない。これらのことからB市における生活課題・困り感が特徴的に見られたのが、病院や医療体制に関する課題や困り感であり、それに関連して通院などの困り感も見られた。過疎積雪寒冷地域にみられる冬場の除排雪の困り感も見られた。

① 医療・通院・病気に関する困り感、悩み、不安

【医療体制・通院・病気に関する困り感、悩み、不安】では、B市には市立病院があるが、特に産科が無く出産がB市で行えないため北部に約30km離れたA市、若しくは南部に約60km離れたD市までに通院・入院しなければならない。そして出産後は、B市では小児科診療が日時によって制限されているため、時間外や入院の場合は、A市やD市まで通院しなければならない。この場合、住民にとって大きな負担感と困り感となっていた。このような医療体制と実情に対して子どもがA市に入院した経験をもつ女性の語りである。

「…A市に急遽、入院しなきゃいけなくなって。それで、私の両親もこっちにいないので。急遽、入院だったのでとりあえず娘と息子(の)2人(を)入院させて、お姉ちゃんの方は付き添い入院という形で一緒に病室に入ったんですけど、…(娘を)…急遽、旦那に(都市名)の私の実家まで夜連れていってもらって。旦那は日帰りでかえってきてという形だったので。できればB市で入院できると。」(B-8)

同様の困り感グループフォーカス・インタビューでも見られ、子育てをする親にとって医療体制が整っていないことへの不安、困り感が見られた。そして緊急の医療機関受診の場合は、特に冬場には自動車の運転に不安や困り感を感じるという。ある子育てをする母親たちの語りである。

「私も夜中何回かA市まで子ども連れて、(自動車で) 走ったことが何回もあります。どうしても夜具合悪くなるのがやっぱり多いので、不便といえば不便ですね (B)。

冬なんか特に吹雪いてたら、ちょっと運転していけないことがあったりとか。小児科の他に眼科とか皮膚科とかも毎日やっているわけではないので、どうしてもちょっと不具合が出てしまうことがあります (C)」(G-B)

また子どもに限らず、壮年層や高齢者の場合も入院や手術などが必要な場合は、他市への通院、入院となり困り感なり、負担感を同様に感じていた。そのため医療機関が地域内で完結しないことへの困り感や不安、心配が特徴的に見られた。

② 除排雪における困り感、悩み、不安

「除排雪における困り感、悩み、不安」では、地域の空き家の除排雪と、地域共同インフラである融雪口利用時間帯に個人が除排雪することへの困難、困り感が見られた。まず、空き家の場合、除排雪する者がおらず、雪が積もっていくばかりとなり、時には地域において危険をもたらす場合もあるという。そのため自治会共同で空き家の雪の積もり具合を確かめながら除雪をおこなうという。空き家の除雪をするある住民は

「…そして何人か集まってきて一軒、空き家があるんですよ。その家の屋根の雪下ろし、皆でやるかいとかいって、降ろして片付けたり…」(B-14)

という。一方、空き家の除排雪に関しては行政との協力をお願いすることを検討していた。そして、ある住民は空き家の現状について語る。

「…空地、空き家が出てきて、投雪がすすまないんですよ。融雪口がついていても投雪する人がいないもんですから…。…だからそれはもうよっぽどでないとなんなんですけど、市にお願いしてとってもらってというようなあれは…」(B-9)

他方で、個人で行う除排雪では、除雪車の除雪後の雪の塊を排雪する困り感が見られた。除雪車は深夜から朝方にかけて除雪を行うが、その塊が朝方に溶け雪の塊として車道脇や玄関先に残される。これらを個人で除排雪していくが、これが氷の塊のようになってしまうことがある。この塊は氷のように固く、そして重い状態となる。その困り感についてある女性は、

「…(除雪車に) 押されて、押されてっていったら、硬くなって、ゴロンとなったヤツ(雪の塊)をダーっと置いていくんですよ。すごいんですよ。半端でなく。…。…ただ、ただ、

こんなゴロンとしたのが、半端じゃないんですよ。硬くなって、重くなって。それをうち（自宅）に帰ってから、なげる場所って決められているから、ずっと向こうの方にまで、投げ（除排雪）に行ってくることを1日というか、2時から4時ぐらいまで…」(B-3)

除雪車が残していった雪の塊は、コンクリートのように固く重いときすらある。それを人手で排雪することは容易ではない。そして雪捨て場の困り感である。個人が過疎積雪寒冷地域で除排雪をする場合、人力の人手で行うには限界があり、それが解消されない場合、困り感となるであろう。

(2) B市における社会関係資本の実態

B市における社会関係資本は、大方、ネットワークは開放的であり、資本の外部性効果は、地域やコミュニティ、公共に対する便益・利益を志向している面がある。このことから「架橋的」な社会関係資本の蓄積と形成と言える。

そこで特徴的なのは、地域生活を営むうえで信頼と規範のあり方について「阿吽の呼吸」で信頼している」というものが見られた。阿吽の呼吸とは、二人の人が、呼吸までを合わせるように共に行動している状況を示したものである。このような状況についてある男性は、

「…うちの班（自治会）はね、信頼できるとか、できないとか、考えていないんじゃないですかね。ごく普通に。もう当たり前、そこに住んでいて、いい（良い）ことも悪いこともね。だいたい特別、公表するわけではないけどね、阿吽の呼吸でね、やってて。だから、いさかいなんてないんじゃないですかね。だから、よくね、よそでは雪で死んだ人とか聞くんだけどね。それ、ちょっと（自治会内では）聞いたことないね。…。…もう信頼しきっちゃっているんですね。…。…だから、まず疑うっていうことが出てこないんですね。」(B-2)。

という。

このような信頼と規範は、個々人の自助規範と地域の共同規範と関連している。自助規範では「自分の周囲に迷惑をかけないようにする」ことであり、共同規範では、他者を信頼することからはじまり、地域活動を若者へ継承していくことへの責任感につながっていた。ある男性は、

「…僕の生きざま。生きざまというか証。僕が亡くなったときに、ああ B-5 さんにこう聞いたなとかね。だから要は先輩から聞いたことを次の代に残さないといけない。家のことは、父親が習ったことを次の世代に残さなきゃいけない。だから、神社とか寺は文化の継承ですよ。そういうのは後輩に教えなきゃいけないし。もう人間に生まれたらこういうことは当たり前じゃないかとおもうんだけど。そうでないといい世の中なんてできないんでない。」(B-5)

という。これは文化的や地域共同規範の継承への責任となり、それらが地域やコミュニティ、公共への便益・利益へとつながっていくことを示している。

このようなつながりは人々のつながりの中でも見られ、地域住民間の信頼としてあらわれていた。そしてその信頼は他者に緊急なことや困難が生じたとき助けあるという形にまで見られた。ある男性は近隣同士の信頼のかたちを語っていた。

「…右斜め前のおばあちゃんは、緊急通報装置つけたときの連絡員になっているので、なんかの時には、ここに鍵ありますよって、言ってくれているので、まあ信頼してくれているのかなと思いますね。」(B-1)

一方でこのような信頼なり規範性には、地域における個人の「埋め込み(む)」が必要となる。地域において個人が自助規範の醸成するとき、地域共同規範や関係性の中で個人は地域にある程度、自身を「埋め込む(み)」という作業をおこなうのである。他市からB市に移り住んだ30代男性は、

「…だから地元の人(B市の他人)が知ってるとか、地元の人に声をかけてもらうっていうのは、たぶんすごく自分の中で価値があるんだと思っているんですよね」(B-7)

という。個人の地域への「埋め込み(む)」のひとつの様相である。これらは信頼と規範、次に見るネットワークを促進するために重要な要因のひとつでもある。

B市では、インフォーマルな地域での声かけ、見守りから自治会活動に至るまで幅広い活動が見られた。そして、これらのフォーマルからインフォーマルな活動の背景には、少なからず自治会の存在が影響していた。

まず近隣住民での声かけや見守りであるが、これらをバックアップ、自治会の班によっては主体的に支援していた。声かけや見守りを積極的におこなう住民らは

「…今、自治会関係の活動をしていますのでね。昨日も1つの班で交流したばかりですね。1つっていったら、15戸ぐらいなんですけどね。…常時は、いろんな話し合いをする方もいますからね。隣近所みんな声かけはしていますね。[声かけは安否確認も含めているのか]うん。そういうことは自治会としてやらんとならないから。特に私はすすんでね。まあみんなで作ってくれてますけどね。」(B-6)

という。またある女性は、

「…(自治会の加入戸数の減少)。だから、孤独死はさせないぞっていうのがあって。音信は、いつでもこの人がどんな状況にいるかっていうことぐらいは聞き出しておいて、気になったら見に行つてとかやりますね」(B-10)

という。その中で自治会活動において「地域で葬式を執り行う風習」が見られた。近年、このような風習は少なくなっており、都市部ではほぼ見られない。ある高齢男性は、

「…あの私の住んでるところはね、…田舎の昔の風習が残ってるんですよ。ほとんどが土着

でね。隣保班が19戸あるのかな？、隣組班ね。…。…。B市はほとんどが残ってるんじゃないですか、やっぱり。田舎ですよ。最近、葬儀屋さんが増えてから、少し疎遠になったけどね。まあ葬式っていうのは隣近所の世話をしたり、世話になったりしなければできないっていう感覚が残っててね。割とそういう付き合いっていうのは、うまくいってるほうじゃないですかね。」(B-2)

という。そして男性は、人々とのつながりという観点からも、このような風習を絶やすことなく継承していかなければならないと語った。

(3) 地域活動に対するつながりと負担感について

B市では自治会活動を中心としながらも、神社との関わりを持つ活動も見られた。これらの地域活動に対するつながりとその充実については、「自分の宝物」や「宿命だな」などとして感じている人々が見られた。一方で地域活動に対する負担感、活動参加者が少ないことや意欲が無い住民に対する苛立ち、そこからくる自治会での役割負担の多さなどが見られた。ある女性らの語りでは、

「…(自治会の人数が)本当に少ない…。みんなやりたくない人ばかりで、全然発展性ないから、イライラしているくらいで…。…。それが困ったなと思っています。私としてはそういう停滞して、何をしようという意欲もない若い人たち、どうしてくれるのと思っています」(B-10)、「近所の方との交流、会話とかは全然負担と思ったことはないんですけど、地域のイベントとかボランティアとかは負担に感じます」(B-11)

他方、ひろがりや負担感の入り混じった感覚では、身体的な衰えから参加できないことに対して入り混じった感覚にあるという。また活動を無理してやっしまい後から身体的症状として現れ入り混じった感覚になるなどが見られた。

このような中で、地域活動に対する負担感、つながりの糧となる住民も見られた。ある若い男性に語りである。

「…活動をしていく中での負担っていうのは、当然、それも含めて繋がれるっていうこと…」(B-7)。

3. C地域における生活実態と社会関係資本の蓄積に関する結果

では、C地域における生活課題・困り感と社会関係資本の実態について見ていきたい。

(1) C地域における生活課題・困り感

C地域は学校関連施設や郵便局以外の生活関連施設などはない。C地域のC町も西部に20km離れており、A市は南部に50kmほど離れている。そのためC地域における生活課題・困り感の特徴的な点は、「買い物に関する困り感」、「医療に関する困り感」、携帯電話の「電波状況が悪い困り感」、「害虫が多いことへの困り感」などであった。ちなみに積雪寒冷地域特有の除排雪に関する困り感、A市やB市に比べれば、豪雪地帯にも関わらず、さほ

ど見られなかった。ちなみに近年では移住者が大半を占め自治会活動でも中心的役割を担っている。

① 買い物に関する困り感

まず「買い物に関する困り感」は、C地域に食料品や日用品を購入できる商店やスーパーが全く存在しない点に起因する。また若年者にとってはコンビニエンスストアが無いことによって生活の不便さ、不満につながっていた。一方で、そのような地域の生活を受け入れている場合も見られた。ある住民は、

「ここに来た時もね、やっぱり、モノがなかったら買いにいけないし、わーっと思ったけど。20年住むとそういう不便さはもう仕方がなくなってくるんです。そういうなんていうの。日々の暮らしの不便さに対しては、ずっと不満かっていったらそんなことはない。慣れですね」(C-23)

という。またほとんどの世帯で民間会社の食品宅配サービスを利用し、日々の生活の困り感を軽減させていた。先述した買い物の不便さとは対極的で食品宅配サービスで事が足りるという住民もいた。ただし、ウィンドウショッピングや選びながら買い物を楽しむという欲求がある場合は、満たされないであろうと語る住民もいた。

② 医療に関する困り感

「医療に関する困り感」は、C地域では医療機関、診療所などが無いため病気や怪我をした場合の受診判断が難しいという困り感を抱えていた。そして医療機関自体が遠方となるため不便であるという。ある学校で勤務する女性は、

「医療が遠いことと不便です」、「…公園でケガしたとかで来ますが、…あまりにも頻繁すぎてちょっと苦しくなってしまうと、勤務外でも気をはっていきなかならなくなったのが苦しくなった…」、「…私は医者じゃないって、声を大にしてお伝えしているんですが。ただ親子留学で保護者と子どもしか住んでいなくてお母さんになにかあった時に、子どもから電話がきたりとか、お母さんが変なんだっていうときはもうなにも考えずに行きますけど…」(C-7)

という。医療機関がない地域において、怪我や疾病が生じたい場合、医療判断や治療を行なえると思える人へ対応が集中していた。しかしその女性は医療判断や治療がおこなえる専門職ではない。そのため勤務外においてもストレスを抱えていた。

また医療面も含めて「突発的な出来事に対して対応できない不安・心配」が見られた。C地域では単身赴任で居住する者もおり、遠方に家族がおり自分自身に何か事件、事故が起きた場合や、遠方の家族に事件、事故が起きた場合、即座に対応できないことへの困り感を少なからず抱えていた。ある単身赴任の男性の語りである。

「…単身赴任中なので何かあった時に、誰に気づいてもらえるかなっていう。…。例えば夜中とかに倒れたってなっても誰も気づいてくれないんだろうなって思って…」(C-11)

③ 電波状況が悪い困り感、害虫が多いことへの困り感

携帯電話の「電波状況が悪い困り感」は、C 地域は隣接する地域への地理的距離が 20 km 離れており、一部区間において携帯電話が圏外となる。そのため自動車事故や冬場の脱輪、スリップ等をした場合、携帯電話による救助要請ができないことへの不安、心配、困り感を抱えていた。ある男性は、

「一番困るのは片道 40 分以上の距離ですから。で、途中携帯の通じないところもあるっていうとそれが心配ですよ。途中でトラブルがあると、携帯も通じないところになると…」(C-24)

という。住民の中には圏外エリアになる前に、家族に連絡を取り、帰りが遅くなるようであれば、トラブルがあったことの徴としていた。そのため家族は帰りが遅い場合には、トラブルがあったと考え出動する段取りをとっているという³。

次に「害虫が多いことへの困り感」では、居宅の居室内に 100 匹単位で害虫が侵入することで生活の心理的満足度に影響を与えていた。このような状況にある住民は受け入れられずにいた。

「…カメムシが家にすごい侵入してくるっていうところが僕の中ではたえられないですね。発生しますね。カメムシ、ハエであったりっていうのはこの自然環境の中でいいんですけど、虫がいっぱいいるっていうのは。僕があんまり好きじゃないので…」(C-9)。

(2) C 地域における社会関係資本の実態

C 市における社会関係資本は、大方、ネットワークは閉鎖的であり、資本の外部性効果は、地域やコミュニティ、公共に対する便益・利益を志向している面がある。このことから「結束的」な社会関係資本の蓄積と形成と言える。

そこで特徴的なのは、まず「学校の存在」と「自治会の存在」である。これを中心として「除排雪の共同体的システム」と「生活共同体的つながり」が見られた。「学校の存在」は C 地域存続の鍵要因である。これによって児童生徒が山村留学し、場合によっては家族も移住する。これらを支えるかたちで「自治体の存在」がある。自治会は学校や地域を盛り立てるため多くの活動やイベントを行ない、住民のつながりを形成しようとする。ある男性は、

「…せっかくこの地域に移住してきた人たちが、やっぱりここに来てよかったなと思えるような行事っていうか、そういうのを組んで…」(C-5)

という。そして豪雪地帯にも関わらず、除排雪に関する困り感があまり見られなかった。豪雪自体は悩みであるものの、除排雪の共同体的システムとして、地域の酪農家が冬期に除排雪をするシステムが構築されていた。この共同体的システムについて

「…基本的には地域の方で除雪を運転できる方がいるのでその人に委託する形でシーズン契

約というか。教員住宅に住んでいる人はほぼ 100%ですね。みんなお金払って、基本的に大量に雪降った時にはやってもらう。少ない時には手作業でできる部分は自分たちでやるっていうことで…」(C-8)

という。このシステムに対して住民らが語るのは、地域の方の「ご好意」という言葉である。この共同体的システムによって地域住民の除排雪の困り感は低減していると言える。

さらに「生活共同体的つながり」では、親密な近所づきあいや、地域住民個人が家屋の修繕や重機の貸し借りなどを協働しておこなっていた。またこの生活共同体的つながりは、地域の消防機能も住民相互でおこなっていた。このような生活共同体的システムに対してのある住民の語りである。

「…ないとやっていけないです。人を頼むにしたってお金かかるし、人っていうか専門的な人頼むにはお金がかかるし。すぐにも来てくれる場合、来てくれるわけでもないし。だから、そういうことに関してここの地域の人達は苦勞しているから。逆にそう、そうそうそう。全部をそろえるなかなか全部をそろえることってなかなかできないから。ある道具を借りたり貸したりすることは多いですよ」(C-2)。

このような「学校の存在」や「自治会の存在」、「除排雪の共同体的システム」、「生活共同体的つながり」は、地域共同体的資源とも言える。地域共同体的資源とは、ハードやソフトに限らず、地域において住民が互助的に利用することで生活を維持する資源のことである。このような地域共同体的資源は、地域の中で生活防衛のみではなく、人々の生活の浮き沈みに対して緩衝材となる役割を担っている。例えば、生活が苦しい場合でも地域住民の一員として地域共同体的資源を利用し生活を維持することができるのである。このような生活防衛、緩衝材的役割を担う資源が C 地域には見られた。この地域共同体的資源を利用、維持、構築するためには社会関係資本の蓄積が重要であり必要となるのである。

では C 地域の人々のつながりはどうなっているのだろうか。先述してきたように C 地域では、住民相互で「助け合いの関係性」がなければ生活が営めないと考えられる。ある高齢女性を見守る女性は、

「足が悪くなって、膝が痛くなってきたので、今、デマンドバスが家の前まで来てくれるのでかなり便利になったんですけど、重たいものを買いたいときとか、急な場合とかは（自動車に乗車させてほしいことを）頼まれるんです」(C-3)

という。また地域住民が総出で転入転出を手伝うという。仕事で居住している住民は、

「…地域の方の引っ越しだったり、こっちに入ってくる時なんかも手伝いますね」(C-11)

という。そして、

「…集まってくれました。ほかの人達も（C 地域を）出るときとか、はいつてくるときは迎

えたり。全員。たくさんあつまって…」(C-16)

という状況である。

このような状況に対して単身赴任で C 地域に居住する男性は、

「基本そうやって困ってる人がいたら助けてくれる、というか助け合っている地域なんだと僕は思います」(C-11)

という。そしてある住民は、

「…親子の方々はほんとに来たらわかると思いますね。もう引っ越しで入ってくる時から、色々、皆さんにしてもらっていますので。であれば、自分達もそういうときには行くというふうなのが自然となっているかなとは思いますが。多分、少ないので声掛けもお互いに行っているんだと思うんですよ。行くよとか、行きませんかとかって声掛けもしているとは思いますが。だから文書一枚で普通にことたりますね」(C-14)

と語っていた。C 地域が住民相互で助け合えるのは、1)地域のすべての人が顔見知りであり、2)協力することに声をかけやすい関係性になっているためである。

一方で地域や地域活動、人々のつながりにおいてダークサイドな面も見られた。それは自治会活動の行事の多さに負担感を感じていたり、プライベートやプライバシーが干渉されたり、常に地域の目に曝されるなどの点である。以下は、それらの語りである。

「…ここは地域少ないので。ああ、そういう意味ではプレッシャーあるかもしれないですね。逆に自分(が、地域行事に)行かなかったら、わかってしまうので。例えば、「あら今日、C-17さんきてないけどどうしたの」とか。「うちに車あったよね」とかそういう話にはなるから。…そういう意味で地域からのプレッシャーはあるのかもしれない…」(C-17)

「…確実にここで生活するかぎりには地域の目がどこでも光っているという感覚はありますよね。…。…見られていてもおかしくないだろうなって思いながら…」(C-11)

「…まあ外から入ってきた方でしゃべってない方は知らない方もいますが、この中で起きれば、大体、すぐばれるっていうかたちですね。昨日、誰々の車落ちたよとかってすぐ。そういうのはあつという間に行きますね。…それは隠し切れないかなと思いますね。…それこそ独身者が誰か同じ車が何回も泊まっていると、あれ、彼女できたとかっていう話になっちゃいますよね…」(C-14)

また地域活動に対する負担感としては、ある 30 代の男性は、

「…そういう地域の活動とかが好きではないので、どちらかといえば負担を感じています。ただやはりうちの C 地域っていう地域は、学校活動も地域の人なしではできないっていう部

分があるので…」(C-9)

という。地域活動は自治会そのものの活動というよりも学校や地域をあげてという側面が強い。そこで少なからず負担感というものが生じていると考えられる⁴。

(3) 社会関係資本の蓄積と形成、そして地域共同体的資源

C 地域では地理的・社会的インフラの制約上、地域住民は共同・協力しなければ生活できない状況にある。要するに C 地域で生活する個人は、C 地域で共有される地域共同体的資源を活用しなければならない。それは主に「除排雪の共同体的システム」と「生活共同体的つながり」、自治会の活動などである。そして自治会活動の一環のようなかたちで、引越しの手伝いをおこなうなどの風習としても存続していた。

これらのように C 地域で生活するためには、C 地域における地域共同体的資源を利用しなければならない。そのため個人の困り感も一定程度、地域における困り感として共有され、地域住民間の助け合いのもとで、その困り感を解消していく。そこでは地域住民らにおける信頼と規範、つながり（ネットワーク）が不可欠である。C 地域で生活をするということは、個人がこれらを受け入れるということであり、個人の地域への「埋め込み（む）」が見られた。この埋め込みがある程度成功すれば、その個人は自動的に社会関係資本を蓄積することになる。そして個人の困り感は、この社会関係資本を活用して解消される。さらにその経験がさらなる個人の社会関係資本の蓄積へとつながる。その結果、生活上の困り感は、地域で共有できる範囲においては、社会関係資本の蓄積と活用につながっていく、その社会関係資本は個人の困り感を解消する機会を与えることとなる。

しかしながら、C 地域の個人は地域のつながりという名の「地域の目」に曝される。個人のプライベートも地域に曝され、干渉と噂話に苛まれる場合もあった。しかし従来であれば、地域のしがらみとして議論は停滞するが C 地域では、新規移住者が大半を占め、そして比較的中年層が多く、学校の存在もあることから若年層も多い。先述した社会関係資本を維持しつつ、新しい地域共同規範や地域共同体的資源が見られる可能性を有している。それは個人と地域との距離感が移住者の場合、「近すぎず、遠からず」、要するにプライベートの詮索や監視にならないような配慮が見られていた点である。そしてそこには元々住んでいる人々の理解も見られたのである。

IV. 考察 ——社会関係資本の実態 / 変化 / 影響 ——

ここでは「Ⅲ. 結果」の 3 つのエリアの結果を受けて、ここでは生活課題と困り感、社会関係資本の 3 つの観点を一体的に明らかにし社会関係資本の蓄積過程・実態、形成を明確にしていく。その際、先行研究の到達点である知見を踏まえて考察していく。

1. 生活課題、困り感から社会関係資本への蓄積・形成の促進

第 1 に、生活課題、困り感が地域で共通の課題となる場合、社会関係資本は蓄積され活

用されていた。これは個人の生活課題や悩みであっても、それらが地域で共有できる課題や困り感であった場合、社会関係資本は蓄積され活用される。要するに生活課題や困り感、不安などが社会関係資本の蓄積・活用、維持につながっていたということである。これが端的に見られたのが C 地域であり、社会的インフラや公共サービスが乏しい状況において個人の生活課題や困り感は、地域での共有（共感）される課題となり、それらを解消するために地域共同体的資源を活用していた。C 地域で住む人々は、地域共同体的資源である「除排雪の共同システム」と「生活共同体的システム」などを利用しなければ、C 地域で住む続けることが難しくなる。結果でみたように実際に、地域に対して困り感やしがらみを感じながらも生活を営むうでこれら資源を利用していた。

またこの特徴が B 市にも少なからず見られた。B 市における高齢者宅や空き家での共同した除排雪作業、自治会で葬式を執り行うなどである。地域において地域共同体的資源を維持、回復、創出しようとする動きである。これらは結果でも見たが、地域において個人が感じる生活課題や困り感がその地域で共有・共感され、社会関係資本を活用・形成することでそれらを解決しようとしたものである。

2. 地域変化の要因による社会関係資本に形態変化

第 2 に、社会関係資本（主に結束型）の蓄積とその過程において、地域変化をもたらす要因の影響を受けると社会関係資本の形態は変化するということである。

地域変化の要因としては、B 市の空き家問題の除雪、C 地域の新規移住者の移住、A 市や B 市で見られた子育て世代の養育の困り感から、地域で生じる揉め事やトラブル、困った人の存在などである。これらの要因が特にネットワークが閉鎖的で、資本の外部性効果が拡散的な「結束型」の社会資本関係の形態に対して影響を与えていた。特に C 地域は、「結束型」の社会関係資本であるが、移住者の存在が社会関係資本に与える影響が強まっていた。地域活動の中心も移住者が担うようになっており、そのため「結束型」から「架橋型」への社会関係資本への形態変化が見られた。その形態変化は、ネットワークが開放的になってきている点であった。

この形態変化に危険性や問題も孕む。先述した河田（2015）の指摘であるが、「…架橋型ソーシャルキャピタルと結束型の緊張を孕む接面における軋轢を、関係的な資本として国家と市場へと媒介する市民的な「利益媒介の仕組み」をいかに構築するかである」（河田 2015;30）である。この危険性や問題も C 地域で起こり得る。しかし、このような軋轢や緊張を自治会や学校、地域共同体的資源が緩衝材となり、問題を緩和していた。要するに「市民的な利益媒体の仕組み」というものが C 地域では自治会、学校、地域共同体的資源として仕組まれているといえるのである。この点は先行研究の知見を踏まえたうえで本研究の独創的な点である。

3. 「架橋型」社会関係資本に影響を与える「結束型」 / 「利益」 / 「歴史」

第 3 に、主に「架橋型」の社会関係資本の蓄積が見られる地域で、地域住民が地域や公共の便益・利益を考え行動するとき、いわゆる「結束型」の社会関係資本の特徴が見られる。これらは特に B 市で見られ、若干ではあるが、高齢者を中心に A 市でも見られた。このような現象特性は、いくつかの要件が必要である。本研究の結果の範囲からすれば、ま

ず、社会関係資本の形態が「架橋型」であり、次に地域住民が地域や公共の便益・利益を志向するときである。

しかしこれだけでは、「架橋型」の社会関係資本の中に「結束型」の特徴が見られるとまではいかない。重要な点は、地域の中であらためて（若しくは新たに）社会関係資本を形成しようとするとき、過去（歴史的な）の信頼、規範、互酬性、ネットワークを想定（イメージ）して考え動くときに見られるのである。そのため結果でも見たように B 市のある高齢男性からは「隣保班」という言葉が語られ、他者を信頼し習慣や文化を次世代に継承していく地域共同体的規範が見られた。これは個人を地域に「埋め込む」ということにつながる。よって個人が自助規範を育むとき、地域的共同規範の影響を受けながら個人は地域に自らを「埋め込む」のである。このようにして「架橋型」の社会関係資本の中に「結束型」の特徴があらわれるのである。

このような特徴が見られたが、これらは良し悪しの判断ではなく、地域特性を踏まえた実態を明らかにしたまでである。大切な点は、このような社会関係資本の特徴をどのように活かし地域づくりへつなげていくかである。

IV. 結論 ——これからの社会関係資本と地域共同体的資源——

本研究では、過疎積雪寒冷地域における生活課題、困り感、社会関係資本を明らかにし、社会関係資本の蓄積とその過程、実態、形成を明確にしてきた。そして先行研究の知見を踏まえたうえで考察することで以下のような結論を示すことができた。それは第 1 に、生活課題、困り感が地域で共有・共感の課題となる場合、社会関係資本は蓄積され活用されるという点である。そしてここでは地域で共有・共感される範囲の課題は、社会関係資本の蓄積・形成を促すことを示した。

第 2 に、社会関係資本（主に結束型）の蓄積とその過程において、地域変化をもたらす要因の影響を受けると社会関係資本の形態は変化するということである。ここではこれまでの先行研究の知見を踏まえ、地域共同体的資源が社会関係資本にまつわる問題や課題を緩和する緩衝材的な役割を担っていた。この地域共同体的資源は、河田（2015）が示唆したところにしたがえば、「市民的な利益媒体の仕組み」であると言える。社会関係資本における地域共同体的資源という仕組みを示すことができたのは本研究の独創的な点とも言える。

第 3 に、主に「架橋型」の社会関係資本の蓄積が見られる地域で、地域住民が地域や公共の便益・利益を考え行動するとき、これまでの「結束型」の社会関係資本の特徴が見られる。ここでは個人の地域への「埋め込み（む）」を踏まえながら資源の利益の志向性（個人にむかうか、地域・社会にむかうか）、地域の歴史性の影響を示すことができた。

以上のことから過疎積雪寒冷地域に住む地域住民には、除排雪の困り感や自動車運転の不安、買い物の不便さなどが見られ、これらの生活課題、困り感が地域で共有・共感されるとき、社会関係資本の蓄積と利用は促されるのである。そのうえで地域特性を踏まえた地域共同体的資源の仕組みを構築・形成することが、社会関係資本につきまとう問題や課

題に対してひとつの解を与えてくれるだろう。さらにはその地域共同体的資源という仕組みが地域住民の生活リスクの緩衝材となり、より良い生活の実現にむけた糧になるであろう。

※今回、紙幅の都合上、3つのエリアの詳細な分析結果と考察を省かざるを得なかった。今後の課題としてエリア毎に質的研究分析を進め、詳細な生活課題、困り感、社会関係資本の蓄積とその過程、実態を明らかにしていく予定である。

本調査研究は一般財団法人 北海道開発協会 開発調査総合研究所の平成27年度研究助成を受けておこなったものである。

謝辞

本調査研究の実施にあたりインタビュー調査の研究協力者並びにインタビュー調査の調整等を引き受けてくださいました役場や社会福祉協議会、関係団体、地域住民の皆様にごこの場を借りて感謝申し上げます。また本調査研究へのご理解と研究費助成をいただいた一般財団法人 北海道開発協会 開発調査総合研究所の皆様にもこの場を借りてお礼申し上げます。

注

- 1 グループフォーカス・インタビューで子育てをするある女性は、「…冬になるとベビーカーが使えなくなって歩いている子たちも2歳くらいだと抱っこ抱っこになってしまうので…」(G-A)といい、冬場のベビーカーの移動の困難さを示していた。
- 2 この点は河田の類型化によれば「仲介型」の社会関係資本の特徴に近いと考えられる。(河田2015) 出所) 坪郷實(2015)『ソーシャル・キャピタル(シリーズ・福祉+α)』ミネルヴァ書房
- 3 本インタビュー調査では、実際に家族がトラブルに対応するために出動した経験があるという人はいなかった。
- 4 また地域活動にの負担感を抱えながらも「…自治会によって交流は、当然あるから、そうやって人間関係もできているし、そこから人間関係ができて助けてもらう、助け合っているのはできるんですけど…」(C-2)として、負担感を踏まえて助け合い関係を見い出している住民もいた。

参考文献

- アルドリッチ D・P(2015)『災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か：地域再建とレジリエンスの構築』ミネルヴァ書房
- ウェインベーカー(2001)『ソーシャル・キャピタル—人と組織の間にある「見えざる資産」を活用する』ダイヤモンド社
- パットナム R・D. (2001)『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT出版
- パットナム R・D.(2006)『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房
- パットナム R・D. (2013)『流動化する民主主義：先進8カ国におけるソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房

-
- 稲葉陽二(2011)『ソーシャル・キャピタルのフロンティア—その到達点と可能性』ミネルヴァ書房
- 稲葉陽二(2011)『ソーシャル・キャピタル入門—孤立から絆へ』中央公論新社
- 宇沢弘文 (2000)『社会的共通資本』岩波新書.
- 宮本憲一 (1976)『社会資本論』(改訂版) 有斐閣.
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社
- 坂倉恵美子(2014)『積雪寒冷地における高齢者の居場所づくり』ワールドプランニング
- 三隅一人(2013)『社会関係資本：理論統合の挑戦』ミネルヴァ書房
- 増田直紀(2007)『私たちはどうつながっているのか—ネットワークの科学を応用する』中央公論新社
- 坪郷實(2015)『ソーシャル・キャピタル(シリーズ・福祉+α)』ミネルヴァ書房
- 本田由紀(2014)『社会を結びなおす—教育・仕事・家族の連携へ』岩波書店

※なお、本研究対象の3つのエリアの概要や基本情報については、ホームページなどを参照したが本研究における倫理的配慮の観点から URL などは割愛させていただいた。